



水戸の時空を ひとまたぎ

第9回

古代の人々の疫病対策

今も昔も疫病とは恐ろしいものです。先人たちも、この目に見えない「疫病」という脅威と幾度も戦ってきたようです。今回は、最近の発掘調査で出土した、古代の人々の疫病対策を紹介します。

問合せ／埋蔵文化財センター
(0269・5090)



清水遺跡(大塚町)

▲清水遺跡から出土した人面墨書土器

今年度、大塚町で住宅建築に伴う発掘調査を行った際に、竪穴住居跡から土師器(素焼きの土器)の甕片が出土しました。この甕片を洗浄したところ、表面に眉毛や目、鼻など、顔が墨で描かれていたことがわかりました。これは奈良・平安時代にみられる「人面墨書土器」といわれるもので、まじないのために、甕に顔を描いたものです。

当時、天然痘などの疫病の流行により、都を中心に甚大な被害が出ていました。古代の人々は、このような恐ろしい疫病を、鬼などの「得体の知れない何か」によるものと考えたのでしょうか。病人は身体に溜まった穢れを祓うため、厄災を運んでくる鬼や疫病神の顔を描いた甕に息を吹き込み、川などに流したと言われています。

人面墨書土器は、奈良時代の都である平城京跡で多く出土しており、地方に派遣された役人たちによって都の外にも広がったと推測されています。市内では、堀町と大串町でも見つかり、どちらの場所でも、古代の役所に関連すると考えられている集落や施設がそれぞれ確認されています。

今回、新たに大塚町で人面墨書土器が出土したことで、この土地にも、役所に関連する施設や古代の官道(国)によって整備された大きな道路などが存在した可能性が出てきました。

人面墨書土器は、古代の疫病に対する向き合い方や、その地域の性格など、さまざまな事実を解き明かす可能性を秘めているのです。

埋蔵文化財センター 丸山優香里

ダイダラボウのひとりごと ～絵のないパズルを組み立てる!?～

調査で出土した遺物は、まずブラシを使って丁寧に水洗いするよ。次に、どこから出土した破片なのか迷子にならないように、極細の筆で小さく名前を書く。文字がつぶれないようにしないとイケないから、とても神経を使う作業なんだ。

そのあと、破片を接合するんだけど、これが難しい! 模様がある縄文・弥生土器はまだわかりやすいけど、その他の土器だとまるで絵のないパズルを組み立てるみたい! 色や質感、形を見ながら悩む



縄文土器の接合の様子→

←破片に名前を書く様子

んだけど、何気なく見た人が、直感でぴったり接合することもあるからビックリ! 接合のあと、足りない部分に石膏などを流し込んで、復元作業は完了。実測や拓本・写真を撮ったら、お披露目までもうすぐだ!



7月号にも登場したダイダラボウM。犬のほかにも手芸が好きだよ。